山海名產圖會

四

目録

○土佐堅魚　熊野

○越前海膽

○桑名焼蛤　時雨蛤

○豫州大洲石伏

○諏訪湖八目鰻　赤魚

○讃州海鼠　熬海鼠　海鼠腸

○西宮白魚　桑名　附　麺條魚　氷魚

○加茂川鯎　加賀浅野川

○神道川鱒

○明石章魚　長濱

J-2811-4

○滑川大梢魚　◎高砂望潮魚

○河鹿　八脊　鼓鮀　井堤　附　魚の品類

○堅魚

土佐阿波紀州伊豫駿河伊豆相摸安房上総陸奥薩摩此外諸州に採るなり四五月の比は六陽に向ひて東南の海に群集して浮泳を故に相摸土佐紀州にはなはだ多く鎌倉熊野に多く就中土佐薩州を名産として味厚く肉肥乾魚の上品とし生食しては美癖あり阿波伊勢これに亞く駿河伊豆相摸武蔵は味浅く肉脆く生食には上とし乾魚にして味薄し安房上総奥州は是に亞

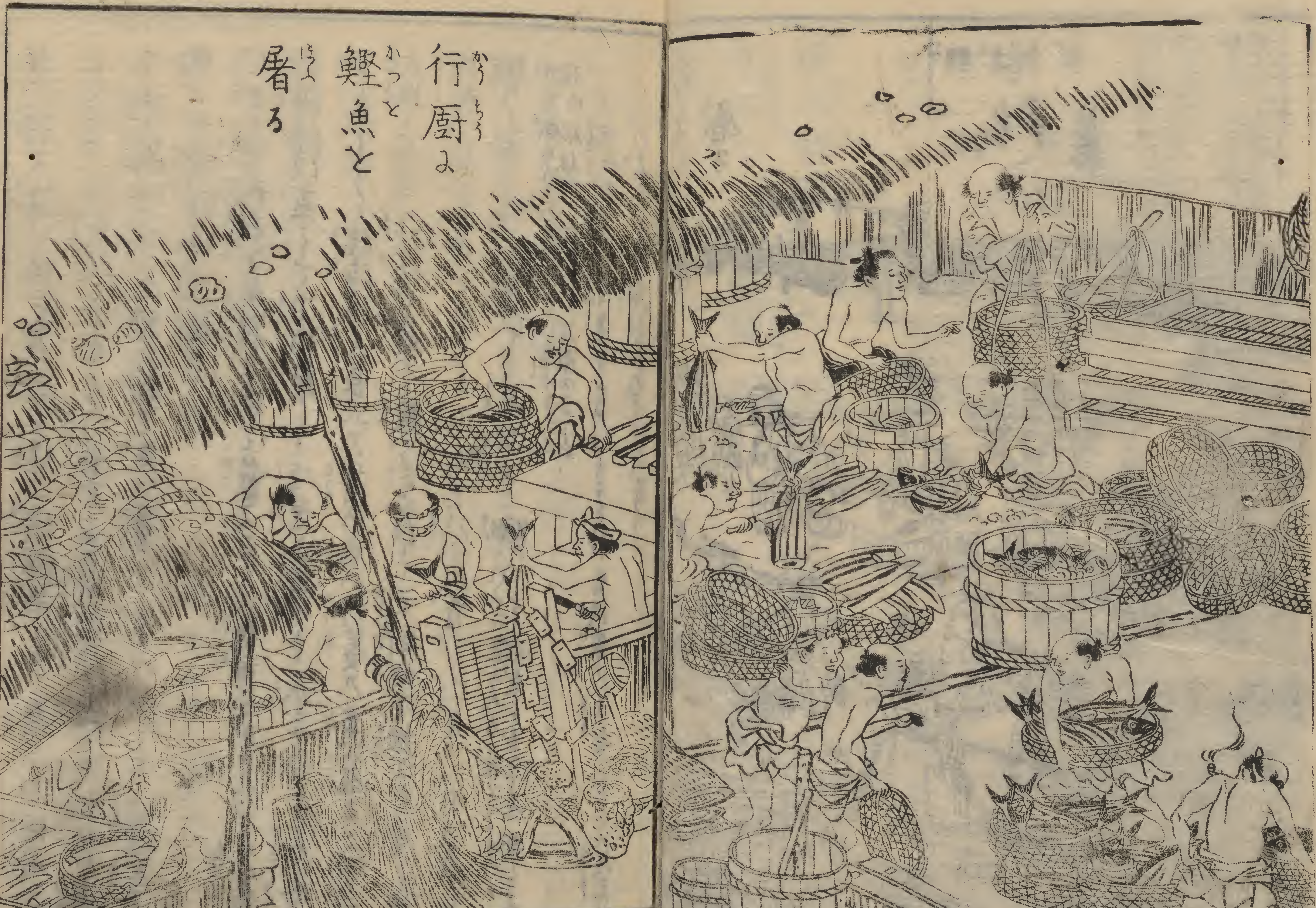
○魚品は　鰹鰹　横輪鰹　餅鰹　宇津和鰹　ヒラ鰹等まで中すも鰹鰹を真物として次に横輪なり此二種を以て乾魚に製じ東國にて小なるをメジカといふ

○漁捕は　網は稀にして釣多し是其時節を撰ばずして你ねは沖に生きども三月の初より中旬までを初鰹として専生

土刕鰹釣

食を五月まてを春節として上品の乾魚とし八月まてを秋
節といふ飼ハ鰯の生餌を用ゆる故に先鰯網を引く事も常し
鰯二坪許の餌籠に入おく汐潮水に浸し是より又三石許の桶
に潮水をたくハへ移し入れ十四五石許の釣舟に乗せて一人
長柄乃杓を以て其汐を汲出せハ一人ハ傍より又汐を汲入て
いきていくして魚の生を保たしむ釣人ハ一艘に十二人釣さほ
長一間半糸の長さ一間許ともに常の物なり但し針の尖にか
へりなし舟に竹簀遮ホの波除ありさて釣をそゝむるに先生
たる鰯を多く水上に放てば鰹これに附て踊り集る其中へ
針に鰯を尾よりさし群集の中へ投れば乍喰附て繋くも猶
餘のひまなくひきあぐれば一顧に數十尾を獲ること堂に數
失を發つがごとし ○又一法に水淺きところは自然魚の集を
しらず鯨の牙或ハ犢牛の角の空中へ針を通し餌なくしても
釣なり是をかけるとふと云 牛角を用ることハ水に入ばおのづから光りありていわしの群にも似る ○又魚或
集んと欲せる時ハたゝあしく牛角に鶏の羽を加へ水上に振て
動かせバ光耀尚鰯の大群に似たり此余天秤釣などの法あると
いへども皆是里人のすさひにして漁人の所業にハあらず
○又釣に乗せる時若遠く餌を遂ふて鰹の群來る時に到てハ
自船中に飛入て其勢なかく人力乃防ぐ所にあらず故
至て多き時ハ殆舟を壓沈む故に遠に是を窺ひて急ぎ
船を漕き退けて其過るを待なり
○行厨蒸乾制鰹鮑
釣舟を渚によせて魚を砂上に擲
上れバ水郷の男女老少となく皆桶又板一枚庖丁を持く
呼ひ集り桶の上に板を渡して俎とし先魚の頭を切腹を抜
骨を除き二枚におろしたるを又二ッに切りて一尾を四片となる
其ハ骨傷ハ桶の中へ落し入れて是ハ雇人各々の得るものと

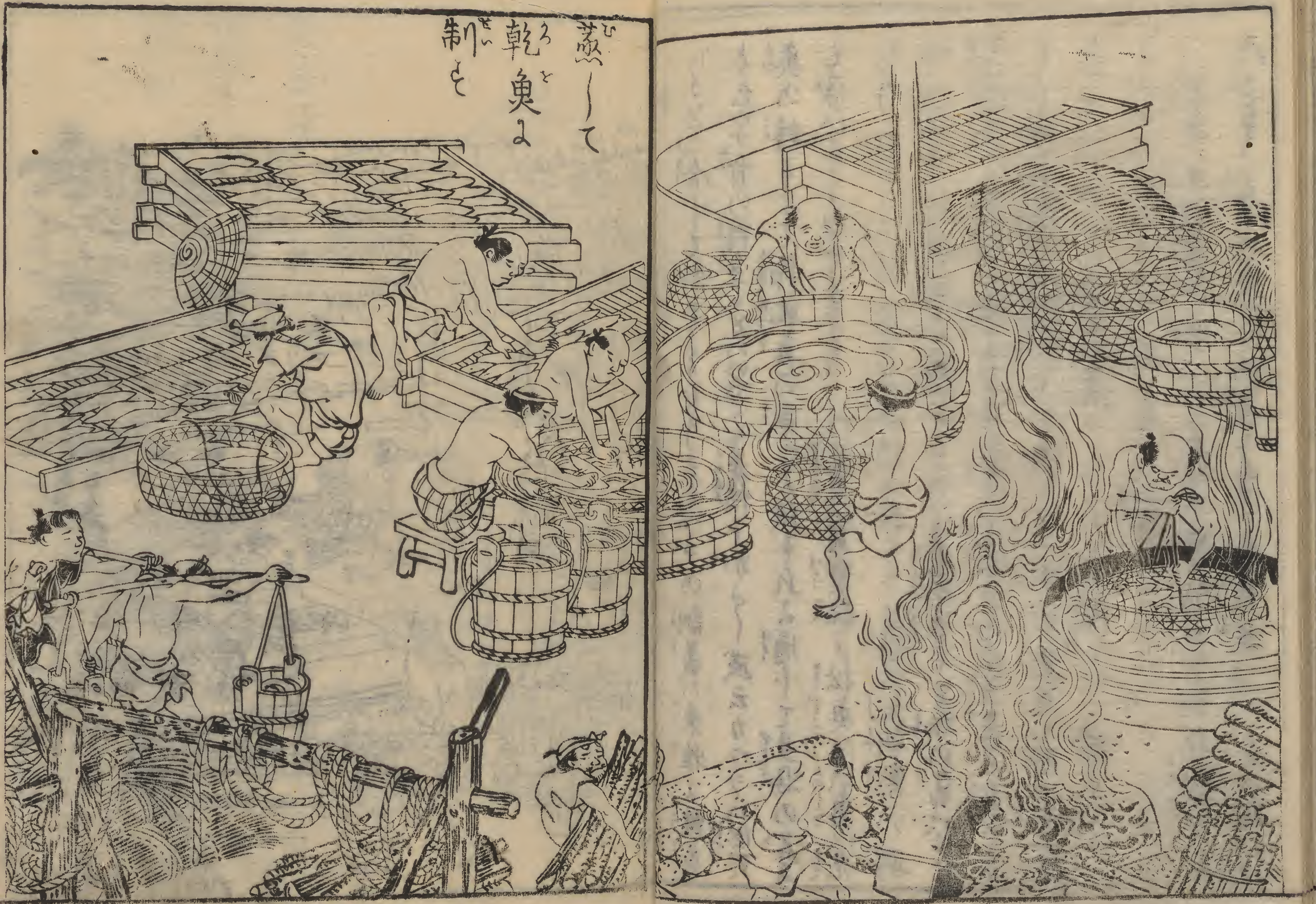
海人釣舟迎て鰹魚救
汀は屠る
鰹魚釣の圖
鰹は釣針多く、これを
たいていかくのごとし 蛤牛
の角須用ゆ
角の中へ鯨の首毛をと
ぢめ針を専用ゆ是に
てんびん針もあり



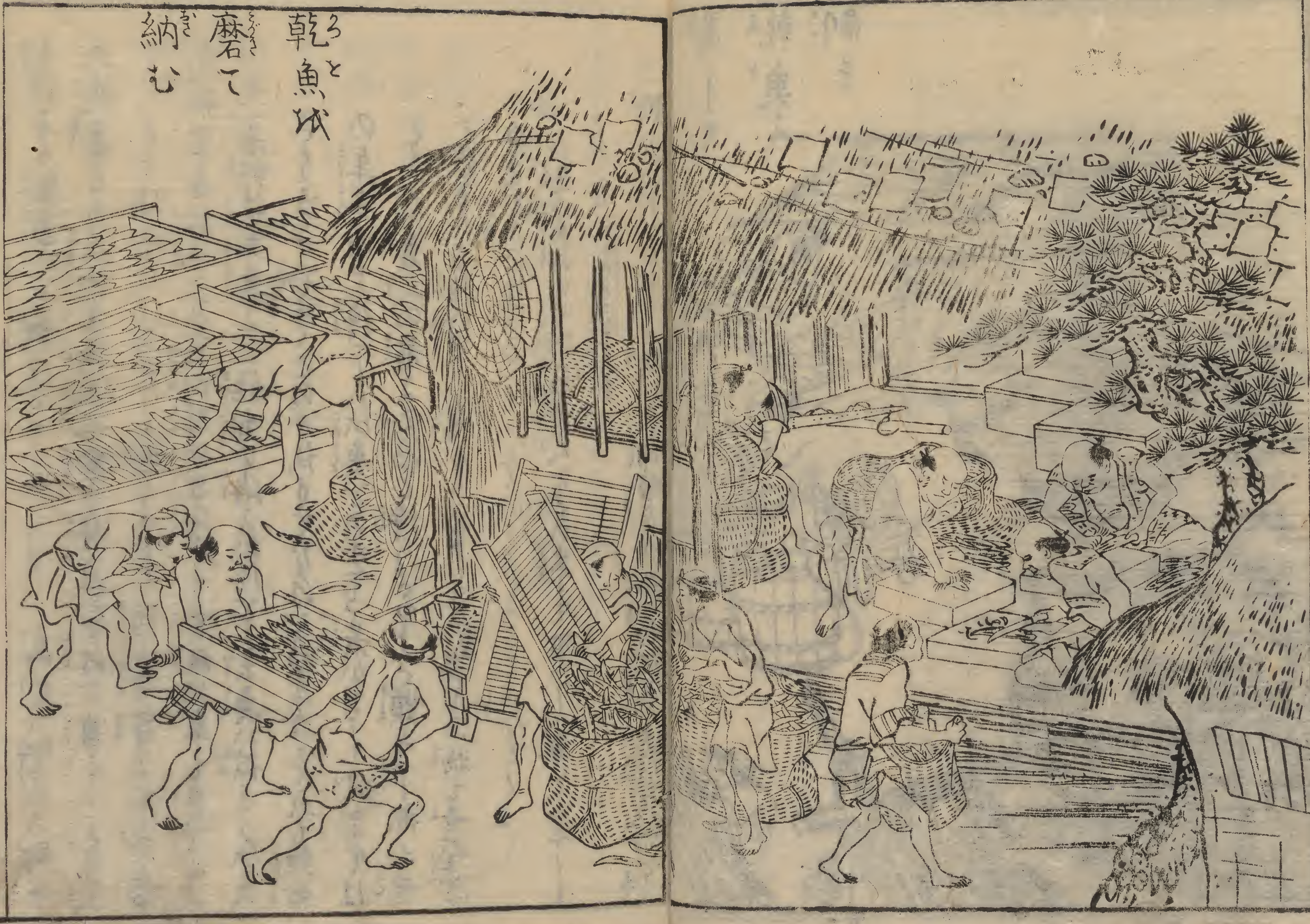
行厨に鰹魚を屠る

去て別に賃を請ども其腸を塩に漬酒盗として售るぞ徳用と
ころなり ○又所によりて行厨と一里許他所に構へ大俎板を置
て両人向ひ、ふら世頭を切て尾を携へて下げ切なるを、其練甚ざ
早し熊野辺皆然て
○かくて形様を能程に造て笊籠にならべ幾重もかさねて大釜
乃沸湯に蒸して下の籠より次第に取出し水に冷し又小骨
を去てよく洗浄ひ又長五尺許の底ハ竹簀乃蒸籠にならべ
大抵三十日許乾し暴し鮫をもてけづり又削仕て縄にて磨くと
成然とし脊節を上とし腹節を次とし脊ハ上へ反て腹は直し
乾かすにハ焼くれば藁火をもつて竈の下より水気を去るまで冷まるる
鰹ともなる魚を用ひて甚腥し
水を撰め故に土佐には清水といふ礒の名なるを用る故に名産の第一とす
○或云腹節の味劣るはいふされども武家の音物とするに後る節
の名をいみて用ひられざるなりけり

○鰹の字日本の俗字なり是は延喜式和名抄等に堅魚とし
たるを二合して制たるなり又カツヲの訓義ハ東雅に鰹魚
と云字音の轉るなりといへども是信じがたし或云カツヲハ堅た
魚の轉にして即乾魚の事なる故それに通じて生物の名に
もおよびけるならひとなり ○又東醫寶鑑に松魚此魚に充
たり此書ハ朝鮮の醫官許俊の撰なるに近来又朝鮮乃聘
使に尋ねしに松魚ハ此に云鮭魚のことといへり肉赤くして松の節のごとし
又後に来る聘使に尋るに古國魚の文字を此の堅魚に充たり
されど是も近俗の呼所とは見へざり前に云鰹魚ハ此に云てナ
カツヲにして一名鮊又魚游と云と云く是舜水のいへるにおなし
くしてナカツヲを鮎とかくは誤りなるべしと云く
○乾魚ハ本邦日用の物にして五味の偏と調和し物故塩梅などか
乃主なり故よりカツヲの名も古し萬葉集 長哥 水の江の浦


蒸して乾魚を制す

乾魚を磨て納む



嶋の子が堅魚釣り鯛はつもりして　下畧　萬葉ハ聖武の御宇の歌集なり又延喜式民部寮に堅魚煎汁と貢ものすと見へていかりは今ニトリといふ物なるべし尚主計寮にも志摩相摸安房紀伊土佐日向駿河豊後より貢献の事も見へたり

○又兼好徒然草に　鎌倉の海にかつをと云魚ハ彼さかひにハさうなき物にてこのころもてなすものなりそれも鎌倉の年寄の申侍りしハ此魚己等若かりし世まではは〻しき人の前に出る事侍らざりき頭ハ下部も食はず切りて捨侍りし物なりと申きかやうの物も世の末になれバ上さままでも入たつわざにこそ侍れと云々

○是ハ兼好の時代にハ貴人などの生にて喰ひし事とはみえずふしと見えず

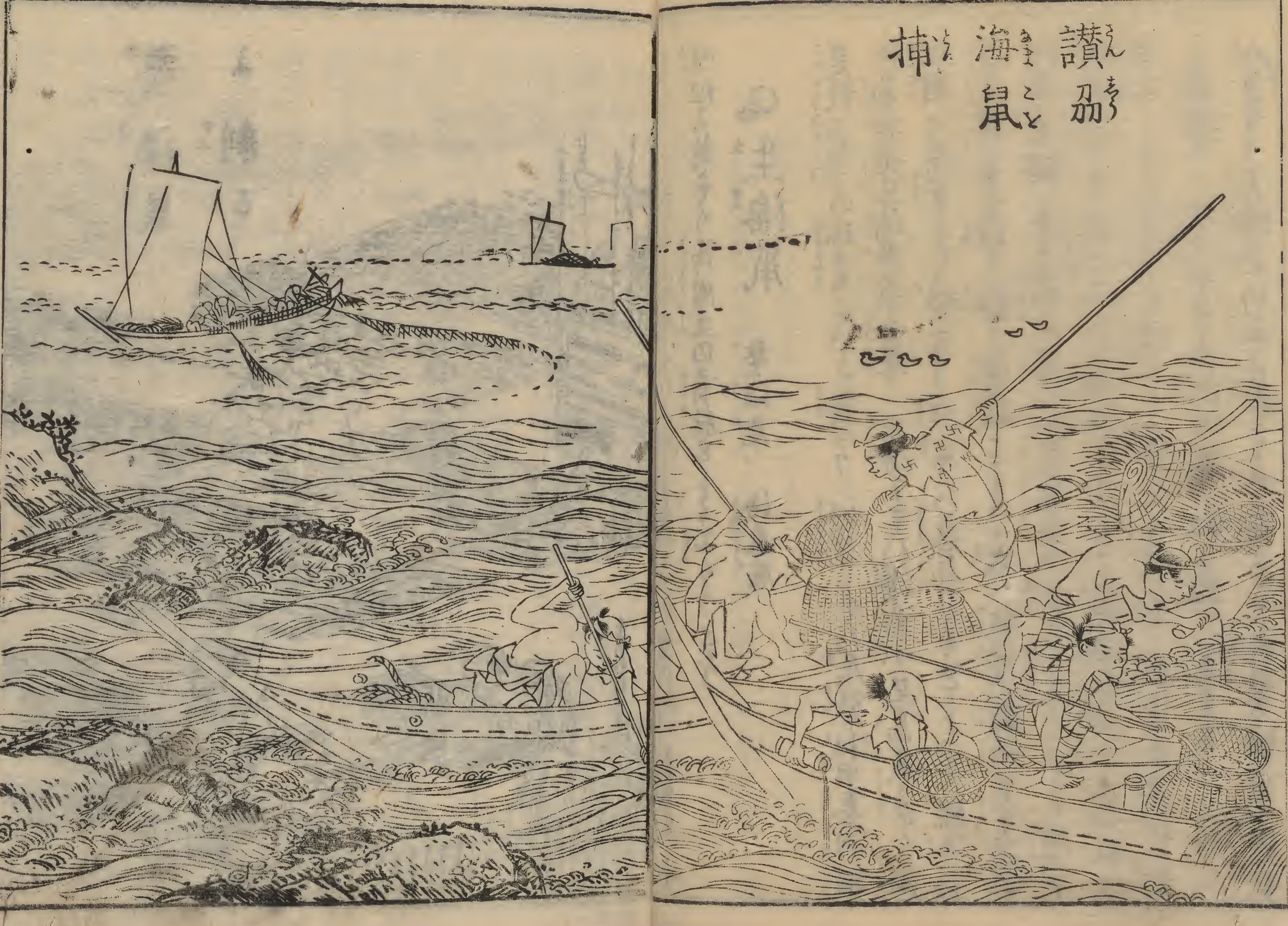
○鰹魚のなまりといへる物なり即鹽なり勢州紀州遠江の物を上品として相州小田原これに亞ぐ又奥州棚倉の物ハ色白くして味他に越たり即國主の貢献とするところなりとぞ

○生海鼠

𧱯海鼠、海鼠腸

是穀品中の珎賞すべき物なり　江東にてハ尾張和田參河柵の島相摸三浦武蔵金澤　西海にてハ讃岐小豆島最多く尚北國の所々にも採れり中華ハ甚稀なるをもつて驢馬の皮又陰莖を以て偽て贋物とするが故に彼國の聘使商客此に求め歸るを悦し是ハ小兒虚羸の症に人参として用ゆ故に時珍食物本草にハ海参と号く又奥州金花山に採物は形丸く色ハ黄白にて腹中に砂金を含む故に是を金海鼠と云

○漁捕ハ　沖に取るにハ網を船の舳に附て走りながら
入るなり又海底の石に着たるを取るにハ即𧱯海鼠の汁又ハ


讃岐海鼠捕

熬海鼠(いりこ)を制(せい)す

鯨の油をもれ水面に點滴をすれバ塵埃を開きて水中透明底を見る事鏡に向ふがごとし然して攩網をもつて是をとる也
○熬乾の法ハ腹中三條の膓を去り數百を空鍋に入れて活火をもつて煮る事一日則鹹汁自出て焦黒燥硬く形微少なるを又煮る事一夜にして再び稍太くなるを取出し冷むるを候糸につなぎて乾し或ハ竹にさして乾たるを串海鼠と云また大なる物ハ藤蔓に繋ぎて懸る是江東及越後の産かくのごとし小豆島の産ハ大にして味よし　薩摩筑前豊前豊後より出るものは極て小なり
○和名抄老海鼠と云物ハ則熬海鼠に制する物是なりといへり又生鮮海鼠ハ俗に虎海鼠と云ひて斑紋あるものにて是又別種の物もありといへり　東雅云適齋訓蒙圖會にハ沙噀とナマコとし

海參をイリコと云若水ハ沙噀收拾全篇とナてコとし海男子

海蛆をイリコとし云くいばを是なることを知ずされど海男子ハ五雜俎に見へし男根に似ることをもつて號けり

○海鼠膓　本朝食鑑に或ハ俵子と称するといふハ誤るに似たり俵子ハ虎子の轉したるにて生海鼠の義なるべし

海鼠膓を取て清き潮水に洗ふ事數十遍塩に和して是を收なり黄色に光り有て琥珀のごとき物を上品とし黒ミ交る物下品なり又此三色相交る物を日影に向ひて頻に攪まハせバ盡く変じて黄色となる或ハ膓一升に鶏子の黄を一ツ入てこれまぜせバ味最も美なりともいへり往古ハ此膓をもつて貢とせしかども能登尾張參河のミにて他國になし是まつたく黄色なるものは稀なるものなり　又一種膓の中に色赤黄にてのりのごときものあり號て海鼠子とて味ことなり

○海膽　一名霊蠃子

是塩辛中の第一とし諸島にあれども越前薩摩乃物名品とし殻

越前海膽

円うして橘子のごとく刺多くして栗乃毬ニ似たり住吉ニて見なぞの濱ニ此刺を削りて小児の弄物のとも形鐙兜ニ似て其口殻乃正中ニあり細く中ニ漆して器物とし肉ハ殻ニ満ること少く甚微ニして膏あり海人塩ニ和して酒殽の上品とし尤黄ニ赤き紋帯ぶるを上とし又大村五島平戸乃産を賞し紫黄なる物ハ薩摩島津の産なり和潤ニして香芳甚勝たり越前ハ物ハ黏粘ありて光艶も他ニ超たり又物ニ調味してハ味噌ニかへて一格の雅味あり海膽焼海膽田楽なと好事ニ任せてあり

○漁捕ハ　海人干潟ニ出て岩間ニもとめ即肉を採て殻を去りよく洗ひて桶ニ収めて亭長ニ送る亭長塩ニ和して售ふ

○ウニとハ海膽の轉りてなり又一種甲兜貝と云物此種類ニして別なり

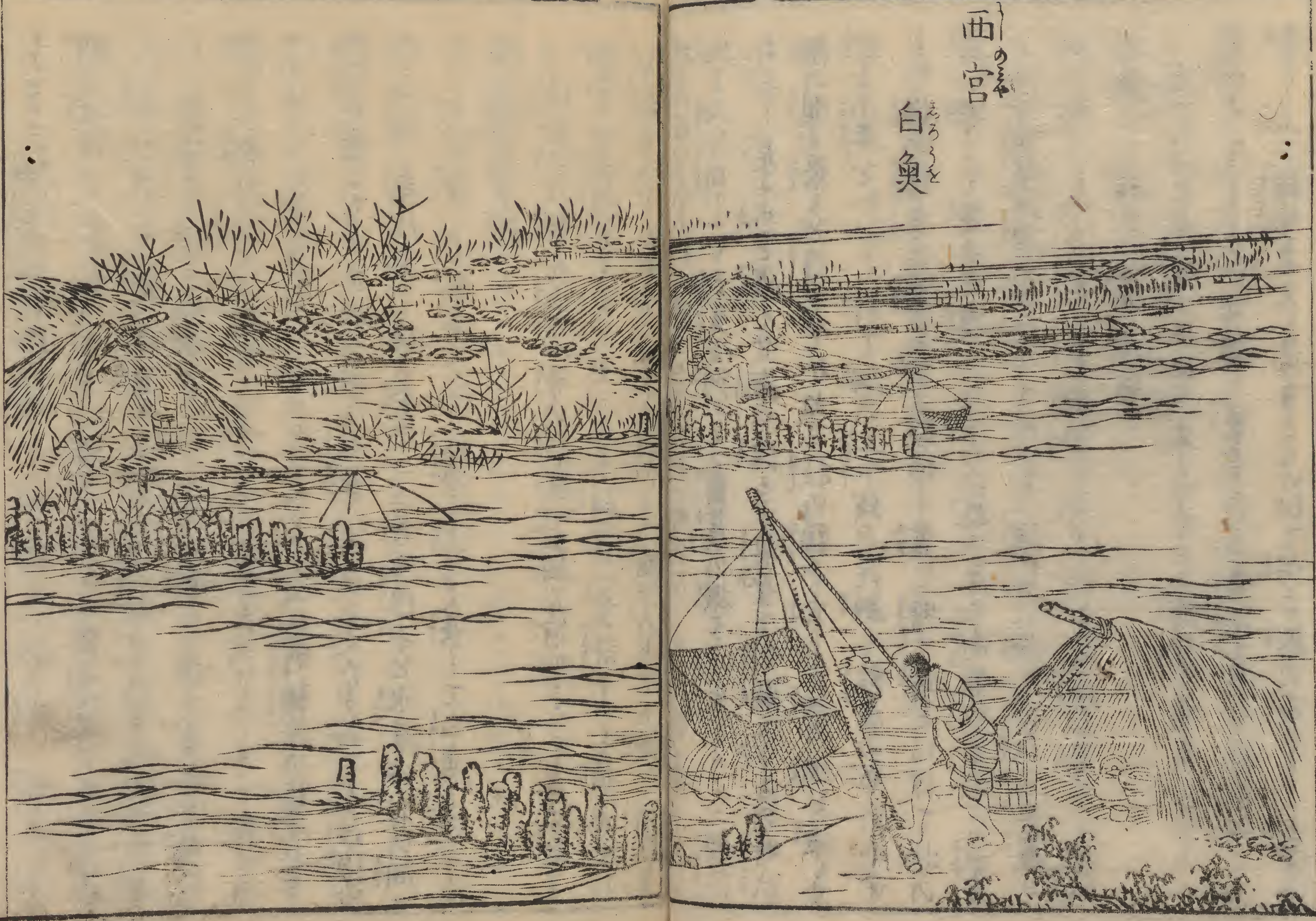
○白魚
大和本草ニ鱠残魚といふて古説キスコといふ説を非せり

摂州西宮の入江ニ春二三月の比一町の間ニ五所許藁小屋作りて両岸同しく太牙ニ列なり留篭の杙を川岸より一二間許打出し是ニ水を湛させ潮の満るニ魚登て引潮ニ下るの時此杙の間ニ聚るを待ちてかねて柱の頭ニ穴して網の綱を通して穴ニ小車をかけ引て網の上下なる網を蚊屋の布の四手ニて杙の傍魚の聚る方ニおろし置て時々是をあげて救の底を布ニて張たる攩ニてすくひ採るなり尚圖のごとし　○安芸ニ此法古宇治川の網代ニ似たり網代木ハ杙を二行ニ末廣く網をおろしたるやうニして其間へ水と共ニ氷魚も湛ひ留ると網代守網して採たり萬葉集ニ

武士の八十宇治川の網代木ニいさよふ波の行へ知らすも

是水のそぐよふを詠たり[illegible]るに白魚氷魚又三月比海より多く上る麺條魚又シロウヲともいひて俗ニ鮎の苗なりと云もの

西宮（にしのみや）白魚（しろうを）



ともに三種皆同物別種の物にて春ハ塩さかひに生じ氷魚ハ冬
湖中波けうさかひ宇治川田上に生ずる事其理一なり又トロ
メハ鮎の苗なり鮎ハ年魚にして年限の物なれども上に子を孕
みて身重き故に秋海をさして落て塩さかひに産れ故に江
海より登りてさかひに生長すと是と浪花川口にとるを経十日
ほどのあるなり又チリメンザコ・チリメン小アユと云則麺條の塩干なるを
此物東武にまなし本朝食鑑に白魚ハ氷魚の大なる物なり江海の
中に生し春に至りて海に登ル二三月の際子を水草沙石の間に
生じ其子長じて氷魚となり江海に至て又長じて白魚となると
云るハ無覚束説なり
○備前平江勢加菜名等の白魚ハ立網又前がさをとりて取るに
菜名の立網ハ長七丈下垂三十八半網の目一歩許アバを桶にてイハ
る鉛なり七人宛乗たる船五艘沖より網を入もて五艘を舫ひ繋

ぎて磯へ漕よするなり網の長さ百尋許にして一網に獲るを
大凡二石許魚澤山なるときにハ貨るに升をもつてはかる又目差
といひて竹に多く刺連ねたる物此地の産なり網とる所へ赤そぐ
濱地蔵 亀津 福嵜 豊田 一色などに採るゝ此間三里の海路
にして其中に横枕といふ所ハ尾加勢加のさかひなり尾加の方
にハ白魚なく菜名の方にハ蝸なし偶得るとも味必美ならず人
是を一奇とす按ずるに是前にいへる潮さかひなり元伊勢の海へ
入江にして菜名福嶌ハ則川口なり上ハ木曽川にて其下流なり
落る西宮に生ずる其理同し
○一種鰯の苗といふ物鷺毛艇と云又潮水に産するに同物なり
一名サノホリと云て冬月採るゝ若加にも似たる魚有アマサキ
と云仲冬より初春に至る又筑前にシロウヲといふ物小にして長
一寸ばかりの物腹下に小黒き點七ツばかり大小に拘らず

○焼蛤 並ニ 時雨蛤

勢州桑名冨田の名物なり松のちゝりを焚きて蛤の目番の方より焼くに貝に柱を残さず味美なり

○時雨蛤の制ハ先づ味噌を漬たる桶に溜りたる溜汁に蛤を煮たる汁を合せ山椒木耳生姜等を加えてむき身を煮詰たるなれハ遠國行路の日をふるとも更に鯘ることなし ○溜味噌の制ハ大豆をよく煮て藁に裹みて竈の上に懸け一月許りして臼に搗き塩と和して水を加へまぜて上をおして溜る汁を醤油にかへて用ひ底を味噌とす 是を以て魚を煮るに若鯖鯵なる魚も後まで味よし 今も飛騨の日用とす

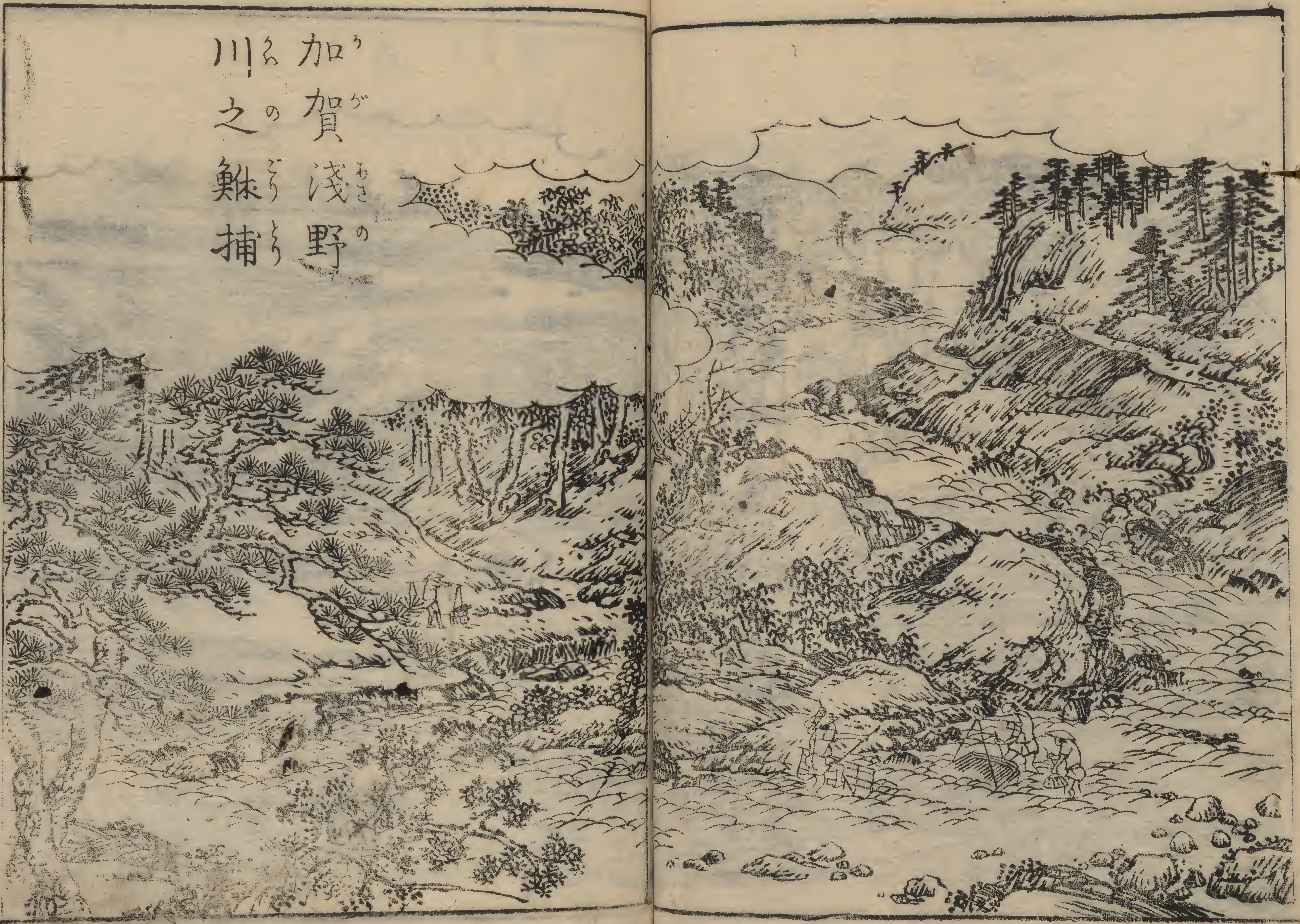
○鯎 字書に見えずといへども姑く俗に従ふ 一名鰔イシフシ

山城加茂川の名産なり大和本草に二種あり一種ハ腹の下に丸き鰭あり其鰭平なる所あり石に付けて是真物とす膾に多し羹として味よし形ハ杜夫魚に似て小さく脊に黒白の文あり又一名石伏と云く是貝原氏の粗説なり尤一物なりとはいへども形小異あり尚下の圖に見るべし

○漁捕ハ 筵二枚を継ぎて浅瀬に伏せ小石を多く置き一方の両方の耳を二人して持あげおれハ又一人川下より長さ三尺余りの撞木を以て川の底をおして追登る魚追ハれて筵の上乃小石に付き隠るを其侭石ともにあげ採るなり是を鯎押と云

○又加賀浅野川の物も名産とす是を採るに加茂川の法に同じくフツタイ 但しおしきと其名を異にするのみ フツタイは割りたる竹にて大なる箕のごとき物を加茂川の筵のかはりに用ひ極おほきさハ竪五尺横三尺許の厚さ板を竹にて挟み下に足がかりの穴ありて是に足を入れて上の竹の余りを手に持石間をおして追来る

加茂川鮴捕



加賀浅野川之鰍捕

豫州大洲石伏

事前に云ごとし

○又里人などの納涼に来りて河邊に逍遥しこの魚を採に人〻香餌をくれの中に握りて水に擲しゴリと呼バ魚群まりて掌中に入るなり又籃にてすくひ採とも有るなり是をしも未熟の者にてハ得やすからず清流淺水といへども見へざる魚なり

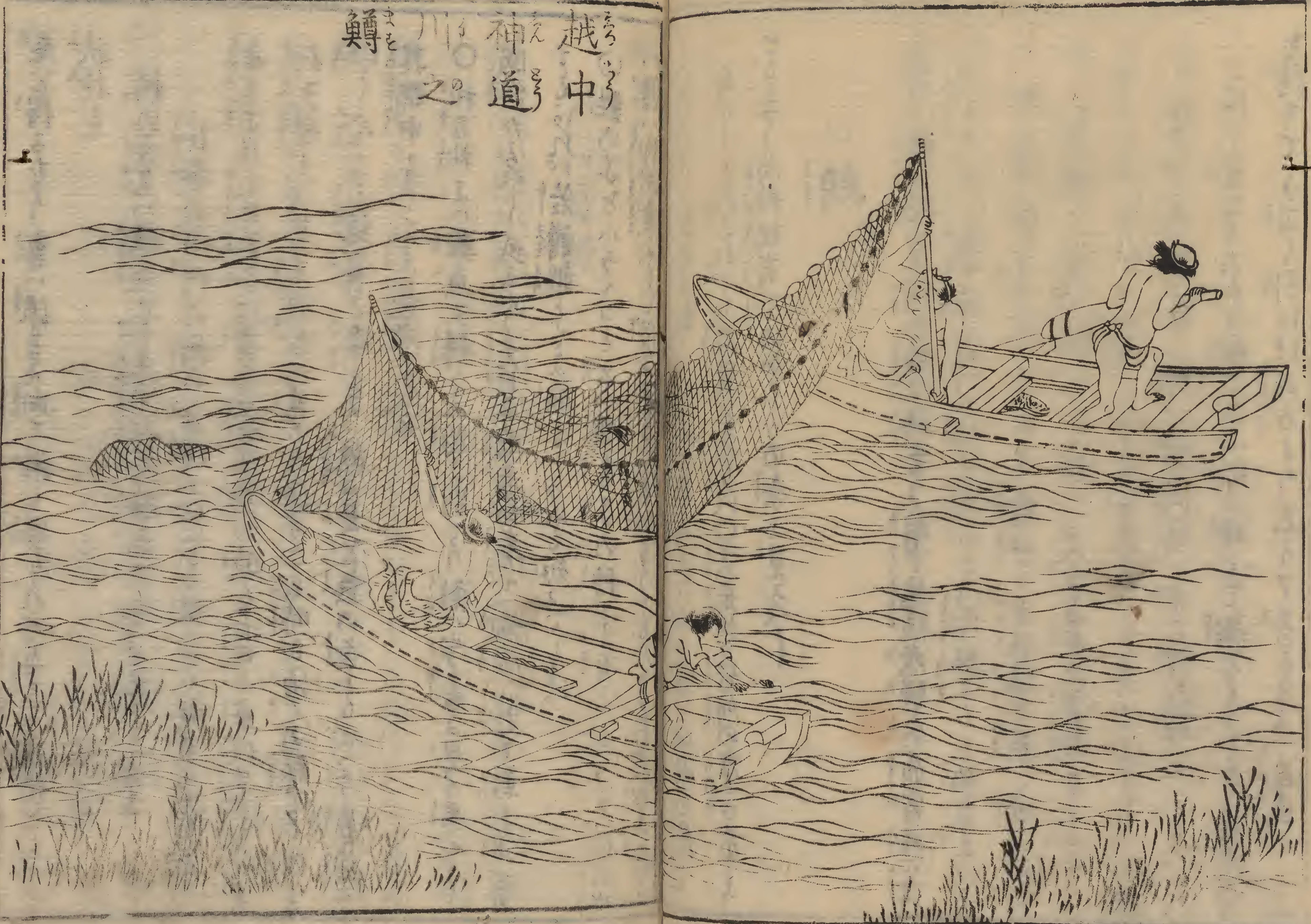
○和名抄にゴリと出さず鮴をいしぶしとして性石間に伏沈

○鯆ハチヽカフリ鰍に似て黒點あり○鯝魚カラカコ 鰍に似て頬に鉤と著る物なり と注せり案ずるに文字に於ては適當とも云がたし和訓義に於てハいしぶし石に伏して今コリ石伏といふにかなへり○ゴリハ鳴く声のゴリ〳〵といふによりて後世の名なるべし○チヽカフリハチヽハ土にて土をかぶり蒙との儀なるべしされハ杜父魚にちかよりし人の音を聞けバ砂中に頭をさして碇のごとくにて一名砂掘鰍とも云 カラカコは頬に鉤を付たるの名なり鉤の古名カコヽも云りカラの義未詳 ○或云聲有魚ハ必ず眼を開閤を是とし一奇なりとはされども其實をしらず○又是等皆所の方言にかゝるとも云り尚辨説有下のかしらの条に見るべし

○鱒

海鱒川鱒二種あり川の物味勝れり越中越後飛騨奥羽常陸等に諸國に出れども越中神道川の物を名品とし即鮓として納め来たる形ハ鮭に似て住む所もおなじ然れども鱗細く赤脈瞳を貫き肉に赤刺多し是を捕るに乗川網といひて横七八尺長五尋の袋網にて上にアバを付下に岩をつけて其間ごとに四寸許るまどもアバは浮きイハは沈みて網の口を開けり長さ竹を網の両端に付て竹の端をにぎりし人二人づゝ乗たるスクリ船と云小船二艘にて網をそろへて魚の入るを待ちてすばやく引あげ両方よりしぼりて寄するに一尾或ハ二三

越中神道川之鱒



尾を得るなり鱒ハ流るゝに向て游ぐ物なれば舟子ハ逆櫓とおして
扶持とて

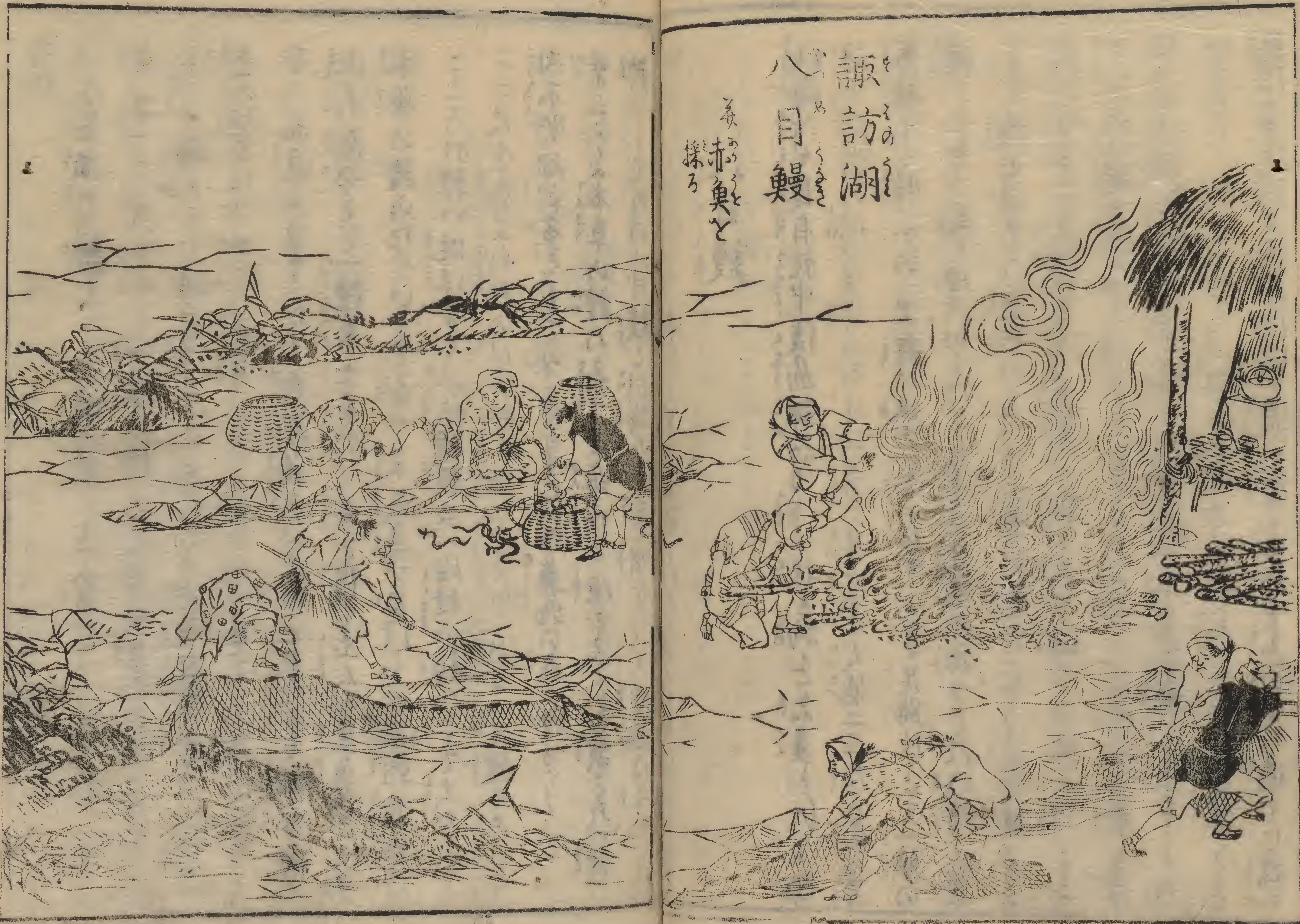
○鱒の古名ハ腹赤と云年中行司腹赤の歎と奏と云ハ
初春の千代の例の長濱に釣せる腹赤も我君のため
毎年正月元日天子に貢して若遅参の時ハ七日に貢しに是日本紀景行
行天皇十八年玉杵名の邑より渡ると云時に海人の献しに依て
以く今まで不絶貢ぎ奉る故に是を熱の魚とも云へり長濱ハ
其郡中にして又長渚とも云

○和名抄にハ鮪魚又鱒と二物に別てり鮪ハ字書に見る事なし
國俗なるべし或云今元日に腹赤の奏を御厨に於て鮭を用ゆる
をもつてみれバ若鱒鮭ともに腹赤といふも知るべからず

○鮭の子をハラヽゴと云ハ腹赤子の轉りしも有り
ハ鱒ハ即鮮魚にして俗にヨヒカハと云物なりしもいろりされども
物にかわれる物其故ちょうやかさぐさぐるならば尚可考ヨヒカハ後赤を鱒と

○八目鰻

江海所々是有就中信州諏訪の海に採る物を名産とす上諏
訪下諏訪の間一里許ハ冬月氷満て其厚さ大抵二三尺に及ぶ其
寒極まる時ハかの一里許の氷のうゑにやしを足跡ありて一條の
道となれり是を神のわたりたまうと号て往来の初めとす此時に至
つて鰻を採る先氷の上に小家を營むなり是を建るに
火を焚して穴を穿ち其穴に柱を立て漁子の休ふ所とす
又網或ハ縄を入るべきほどくを穿つも薪を積
焚き延縄と入る共餌を以て釣り採る事其数夥し氷なき時
ハうなぎ採を用ゆ又此海に石斑魚多し一名赤魚又赤腹とも云
是ハうけ網を竹にかけて氷の穴より入れ氷の穴へ通して採る


諏訪湖八目鰻
并赤魚を採る

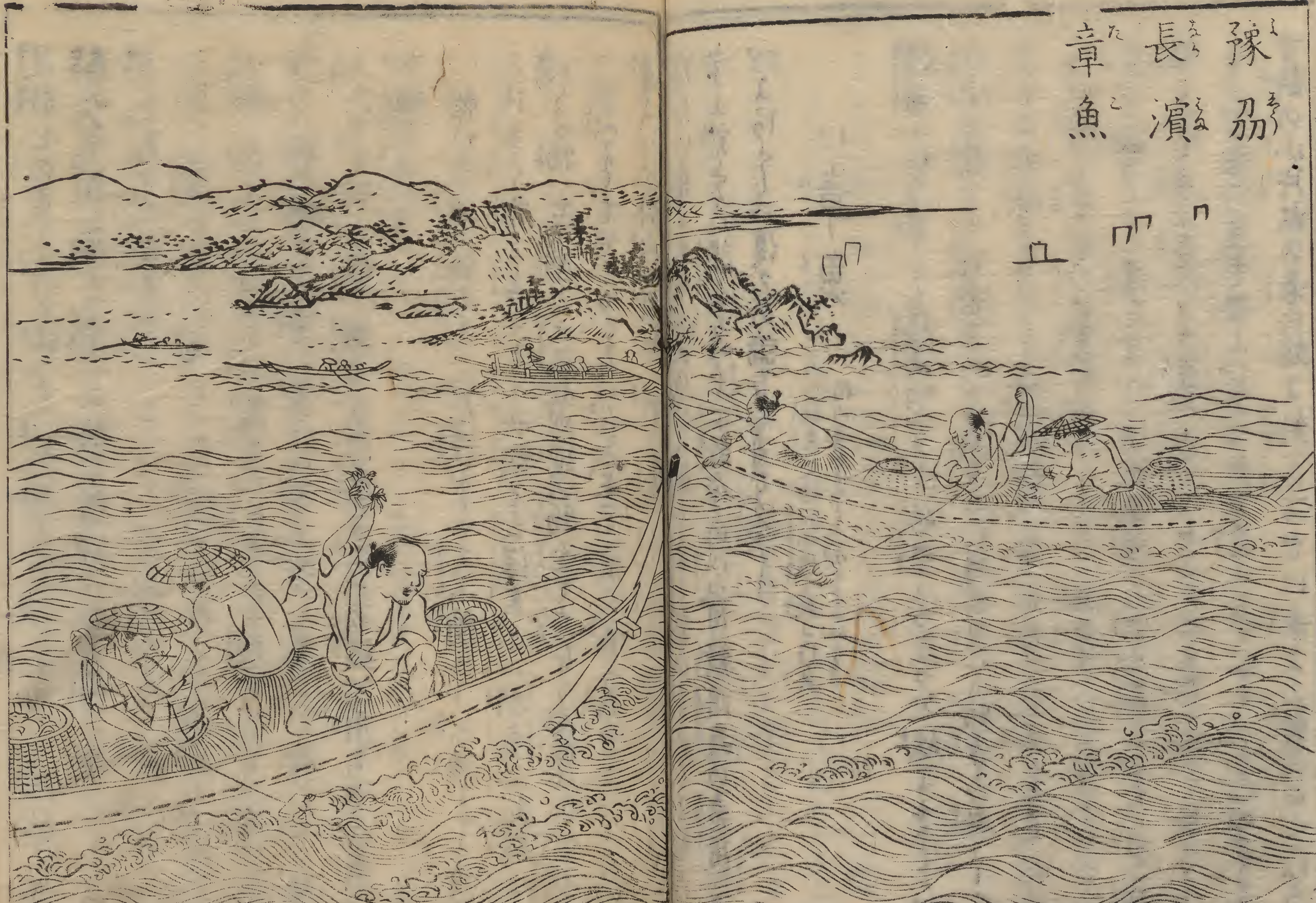
附記

○本草綱目に鱧といふは眼の傍に七ッの星ありといふに付て今此魚にあてらる　或云今も漢渡の鱧ハ一名黒鯉魚と云ひて形鯔に似て小く鱗太く眼の傍に七ッの星あり全身脂黒色にして深黒色の斑点あり華人長崎に来て是を九星魚といふ然ども星ハ七ッなり和産にはなきことなし恕庵先生八目鰻にあてたるは誤なり近来南部にて一種首に七星ある魚を得て土人七星魚といへ是本条の鱧のたぐひにや否や未其真を見ずと云く本朝食鑑に説ところの鱧ハ涎沫多く状略鰻鱺或ハ海鰻の類ひにて大なるもの二三尺余脊に白點の目の如き物ハ九子なり故に八目鰻と号く其肉不脆細刺多くして味美ならず唯薬物の為に採るなりと云く案ずるに本草の鱧乃条下に痔疾を療ずることを載ざれば鱧ハ鱧にして此の八目鰻と別物なる事明なり又食鑑に云ところ痔疾の薬に充てし此の八目鰻なることを疑ひなくいひて鱧乃字に充らるゝハ誤なるべし正詮今の八ッ目鰻痔疾の薬用になるにはあらば漢名の論ある事無用なるべし

○章魚　一名ハ梢魚　又海和尚俗に鮹に作る　梢の音とちかく二合せるに似たり

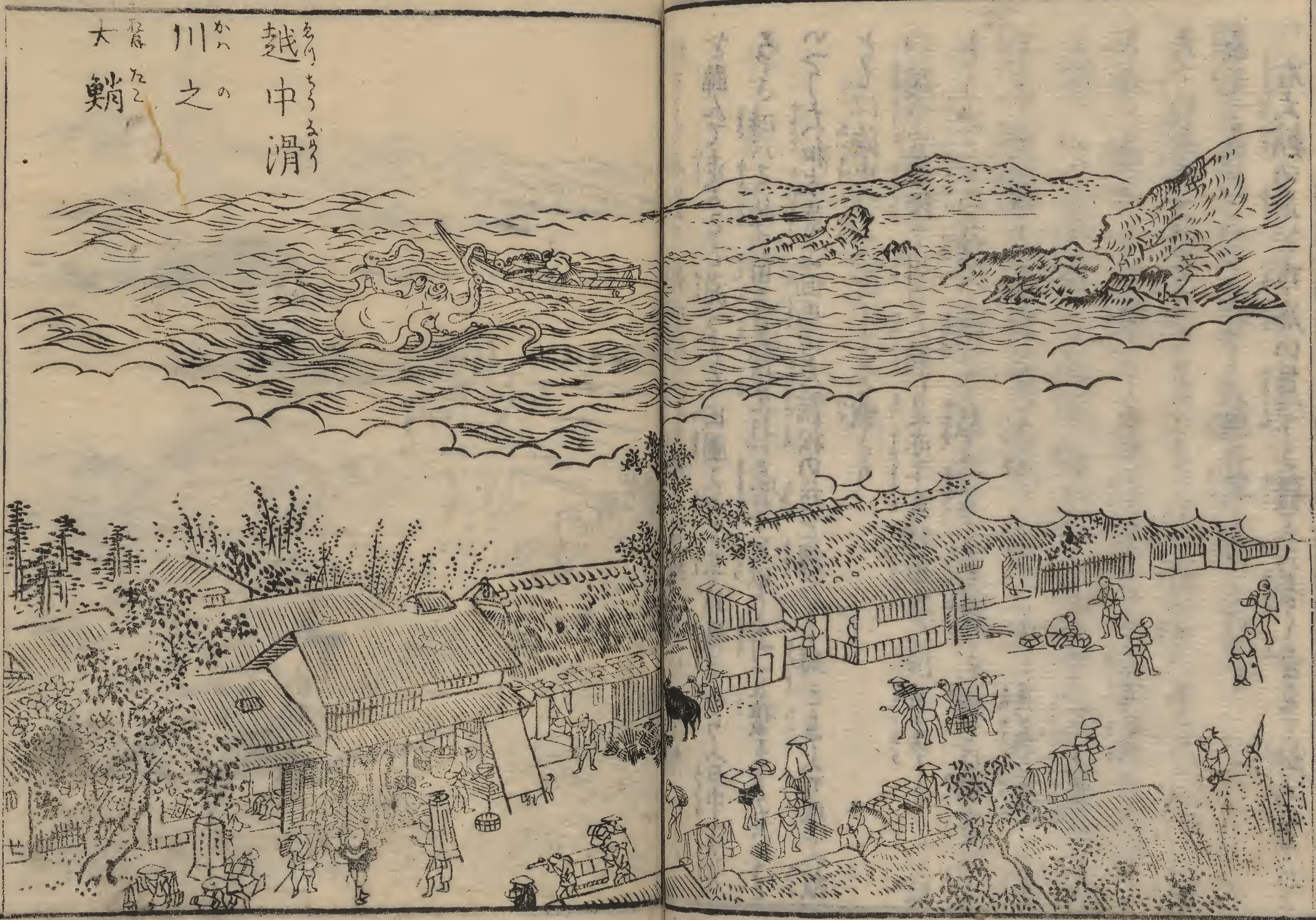
諸州にあり中にも播州明石に多し磁壺二ッ三ッと縄にまとひ水中に投じて自来て入ると常とれ磁器是を鮹壺と称して市中に蓄籠ともなして用ゆ鮹ハ壺中に付て引出さんとすればらぐ時に壺の底の裏を物をもつて掻払へバそのまゝ出て壺を放るゝこと速なり○伊豫長濱にハ此魚甚だ多く故に漁蛸として市に出る是ハスイチヤウと云物を以て取るこれに五六百より艘にハ千二千に及ぶスイチヤウとは四寸に六寸許の小片板の表の端に釣を二ッ付け表にハ蟹の甲をはぎ

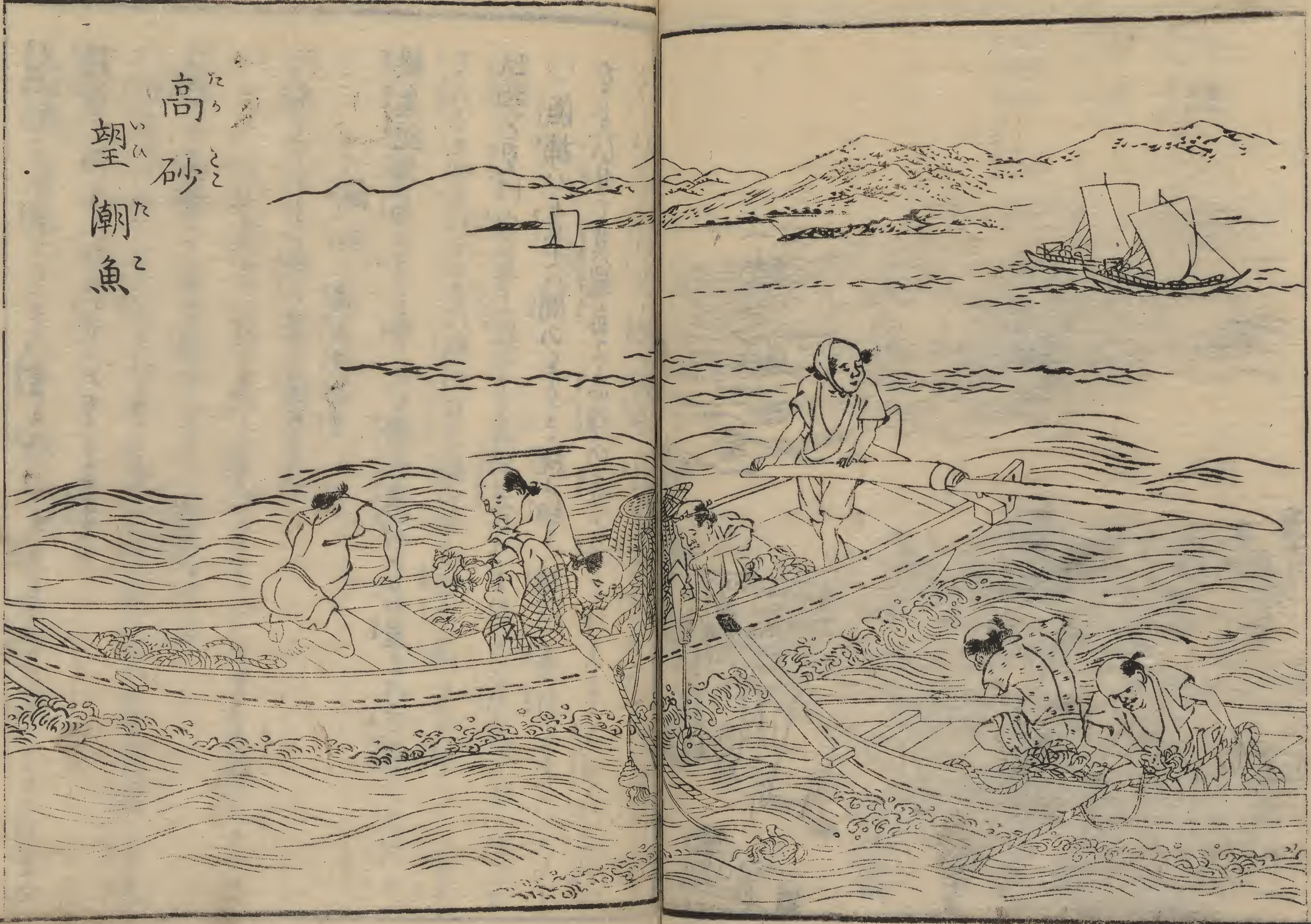
豫刕長濱章魚



足許とのごとし石を添へて二所藁にて括りたるを三ツ許長四五十
尋の苧糸に付て水中に投いれバ鮹ハ蟹の肉を喰んとて彼の
上に乗るをまてそろ〳〵としてひきあぐるに岸近く或ハ水際まで
に至て驚き逃んと欲してかの鈎にかゝるなり泉州赤石法をもて
小鮹を採るにハ烏賊の甲蕎麦の花などを餌とし長州赤間関の
辺にハ船の艫先に篝を焚けバ其下多く集りて頭を立て踊り
上るを手ごと〳〵に攫て手の及ざる所ハお鎗を用ちゐて取る
丹練尤妙なり
○鮹ハ普通の物大さ一二尺許りして又小鮹なり京師にて十月の
ころ多く市に售るを十夜鮹と云漢名小八梢魚又絡蹄とも云
大なる物ハ七尺鮹と云又北國邉の物至て大なり大抵八九尺なり
一二丈にもしてやゝもすれバ人を巻き取て食ふ其足の疣ひとつ[illegible]
膚につけバ血を吸ふて甚だ急しくて忽ち斃る犬ハ鼠猫[illegible]

捕るも亦然り夜水岸に出て腹を捧頭を昂け目を怒らし八足
を踏んて走ること飛がごとく田圃に入て芋を掘てくらふ日中にも人
なき時ハ又然り田夫是を見れバ長竿を以て打て獲ることありと
いへり大和本草に但馬の大鮹松の枝を纏ひし蟒と争ふて終に枝
ともに海中へ引入れしことを載たり
○越中富山滑て川の大鮹ハ是亦牛馬を取喰ひ漁舟覆して人を取
なり漁人是を捕ふに術なし故に船中に空寝して待てば鮹窺ひよりて
てよく延船のうへにおかくるを目早く艣をとりて其足を切落し速
に漕さかるに其危きこと生死一瞬の間に関る誠に壮子の戦場に赴
き命を塵埃よりも軽んずるハ忠又義によりて人倫を明らかにし或ハ
天下の暴悪を除かんがためなりされども鮹の足一本にくらぶべてハ紀信
義光が義死といへども惜まれ物の数にハあらざるべし
右大鮹の足を市店の簷下に懸れバ長く垂れて地にひかれて


越中滑川之大鮹


高砂望潮魚

又此疣一ツを服して一日の食に抵つても足れりとせりとなりこの余の種類人のよく知る所なればここに畧す

○鮹の子ハ岩に産附る故磨り子といひて糸すぢのごとき物に千萬の數を連綿せり是故塩辛として海藤花と云

○タコとは手多き故とて号けりタは手なりコは子まで頭乃禿よりて猶小兒の儀なり

○飯鮹 ○漢名望潮魚

摂泉紀播州に多し中にも播州高砂を名産とす是鮹の別種にして大さ三四寸にすぎず腹内白米飯の如き物充満せり食鑑に云江東未此物を見ずと安房上総などにも偶是ありといへども其真をしらずとぞ

○漁捕ハ長七八間のふとき縄に細き縄の一尋許なるをいくらもならび付て其端毎に赤螺の殻を括つけおきて海中に投潮のさしひきに波動し時ハ海底に住て穴を求るが故にこの赤螺に隠れとひきあぐるに貝の動けども尚底深く入て引るに用捨なし

○河鹿

諸國にかじかとされの品類多く或ハ魚或ハ蛙なりともいひてひとのくちにハ唱ふといへども慥ならずかと云名故上にいふの又詳さ物語等に見ゆることなし唯連歌の季寄温故日録に杜父魚カジカとしてなんの子細も見へず八目の部に出せるかと見ゆるのみなり其余又俳諧の季寄等に近来注釋を加へし物を出せしに三才圖會などの俗書によりて石伏などゝ混じて古書物語等を引用るにおよびては又貝原氏大和本草の杜父魚の條にも河鹿として古今のまよひをとりいふべき全く筆の誤なるべし案ずるにかじかの名目ハ是俳諧師などのにごさへもいひそめて恐らくハ寛永前後の流行なる故西行乃哥などといふを偽て出して人に

信ぜさせじとにもはかるべき既に俗傳に西行更級に住けるとききたるが
つくりて

山川に汐みちひさ志られけり秋風さむく河鹿なくなり

是何の書に出せる哥とも志られざれども或人に就きて此哥の意
を尋ねきバかくかる汐の満ぬる時ハ川上にむかひて軋々となき
汐のひく時ハ川下に向ひてこつ／＼となくといふ蒼ぐさられど
解く處ゴリキ・なども云奥をさへに似たくいよく昔の證據にも
ならず水中に多かる物ハ蛙水鳥の類なれば言より吟賞の例を
こそ見ゆされども西行ハ哥を随意にはからねそろひところれおくそのま
當時くいくての物とよそへてもかひなるがちに語むるにハ及ばねども業
くも偽作なるべし又萬葉集の哥なりとて 建礼門院の右京大夫の家集に一説に落合の瀬とよせて云々

山川に小石ながくこほくと河鹿なくなる谷の落合

是又萬葉集にハなきことなし其余他書に載たるをしらず

也又夫木集廿四雑六岡本天皇御製とて

あふみぢの床乃山なるいさや川このころ〳〵に恋ひはわたらん

このころ〳〵といふをはきさてかじら鳴によせしなりとといひ
つゝてはくるなり是又誤りの甚しきなり是ハ萬葉集第四に

あふみぢの床の山なるいさや川けのころ〳〵は恋ひつゝもあらん

とありて代匠記の注にけとは水氣にて川霧なりとはくしくあれ
唯此哥の様もころ〳〵とよせし所謂なれバこそとなへかなふべかし
かの哥よりはかはづなる證もなくかはらてどもまそかきさざう
なりしかとてども今さしてそれと定むべきかしこれ説もあれ
ど今の奥さもはれしらるもあれそぞ作りに従ひて秋の水中に
鳴くものとかの哥の様になすからぬてれかしりといふへきこ強く妨
げもなかるまじささとなれどさしはかられ物によりて詠歌なさせんて
そいと口惜しからんさらくべからこしく古を求めんとする長明

無名抄にいへる井堤の蛙といふ事のかしこきことはよく論

ぜり

○其文に曰

井堤の蛙ハ外に侍らず只此井堤の川にのミ侍るなり色黒きさやうにていと大きにもあらず世のつねのかへるのやうにハあらはにおどりありく事なども侍らず常に水にのみすみて夜更てあるほどになきたる声はいみじく心すみて物あはれなる声にて侍るなり

是今洛に八瀬またハ浪花の人ハ有馬鼓が瀧の邊に捕る物即井堤の蛙に同物にして今のかじかなる事疑ふべくもあらずされど和歌にはかはづとよミてかじかとはよまざるにかじかの名は俗言とやいふ賤しきものなるべし昔井堤のかはづとぞ歌に愛せしことは書くに見えたり今八瀬有馬井堤に取るもの悉く其なれ

帯刀の長節信ハ数奇の物なり始て能因にあひて相互に感有能因云今日見参の引出物に見すべきものゝ侍るとて懐中乃錦の袋より鉋屑一筋取出す是ハ我重寶にて長柄の橋造の時の鉋屑なりといへば節信喜悦甚だしうして是も懐中より紙につゝミたるものを取出せり是をひらきて見ればかれたる蛙なり是ハ井堤乃蛙に侍るといひて共に感歎して各懐にして退散す今の世の人ハ可稱嗚呼歟云々

是等はからなくも言さと見ひし風流人の一癖なり長柄の橋ハ既に古今集に世の中にふりぬるものは津の國の長柄乃橋と我となりけり又蛙なく井堤の山吹ちりにけり花のさかりにあはましものをと古今春の下に見へたるよりかはづとなくをもて井堤の冠辞にとけるのなじみとなるにより古よりかはづのやうもかよふしとおもふも是俗意なり後拾遺の秋へ

無名抄にいはく井堤の蛙といへるのかしこにいひつたへたるはよろしく條あり

○其文ニ曰

井堤の蛙ハ外に侍らず是ぞ此井堤の川にのミ侍るなり色黒きやうにていと大きにもあらず世の常のかはづのやうにあらはにをどりありく事もいとしも侍らず常に水にのみすみて夜ふくる程にかれがなきたるはいみじく心すみて物あはれなる声にて侍るとなん

是今洛にハ八瀬にこれあり又浪花の人ハ有馬鼓が瀧の邊に捕る物即井堤の蛙に同物にして今のかじかなる事疑ひなくも侍らんされど和歌にはかはづとよみてかじかとはよまざるかじかの名ハ俳言といふなり愆ちなるべし　青井堤のかはづとて洛に愛せしこと書くに見ゆる今八瀬　有馬　井堤に取るもの悉く其類也

帯刀の長節信ハ数奇の物なり始て能因にあひて相互に感有能因云今日見参の引出物に見すべきものありとて懐中より錦の袋より鉋屑一筋取出し是ハ我重宝にて長柄の橋造の時の鉋屑なりといへば節信喜悦甚しくしてこれも懐中より紙につゝみたるものを取出せり是をひらきてみるにかれたる蛙なり是ハ井堤乃蛙に侍るとてともに感歎して各懐にして退散す今の世の人ハ可称嗚呼歟云々

是らもなく古きを弄びし風流人の一癖なり長柄の橋ハ既に古今集に世の中にふりぬるものは津の國の長柄乃橋と我となりけり又嬉なく井堤の山吹ちりにけり花のさかりにあはましものをとは古今春の下に見へたるよりかはづぞなくをもて井堤の冠辞にをけるのちにかはづとなるによりて古よりいひたる乃やうにもなりしとおもふも是俗意なり後拾遺の秋へ

良暹法師

ききなれてきこく蛙の諸声にまじりて流るる井堤の淀ま
これ風情ハかはづの蛙の諸声に鳴立てきこえさうらふ乃かまび
すしさに似たり是によりて今古の変遷をかんがふるに井堤をよむ
ことハふるく萬葉人丸よりあまたあり蛙と詠合せしことも古ハ小町
貫之が家の集に見えたり又良暹ハ祇園の別當にして母ハ實方
朝臣家の童女白菊といひし者にて是一条院前後の人にて詠
蛙もむかしのまゝなりしと長明の時までハ皆大凡三百年二百年
を経しうへたるる井堤の川も年月に埋られ又山陰の茂樹に覆ハ
れ至て陰地なる蛙も形色音声をかはりたまへしとは見えたり
是故いかとなれバ今にも常のかはづをとりて陰地の池にはなちハ
野中の井なれど放てハ月を経て色黒く声も変るゝと
試みてまいり故に今八脊有馬井堤に鳴かはづの悉く其ならば
いつまでもかはらぬハ閑情に鳴く物ハ又其さまも異なれり
所あり是蝦蟇の一種にして蒼黒色にて前の足に水かきなく
指先皆丸く清水にすみてなく聲夜ることさらに似てころころと
いふがごとく六七月の間夜一時に一度鳴り晝もなきて鴫の声の
如し又足早くして捕ふにやすからざれバ夏の土用の水底より
取る時とのミ窺ひて捕まり今奥をもて其物に混ぜしハられか
しらの俳言よりかはづの昔とことなれえとり長明の頃しらハ幾
そびの変世に下て末て近来かしらの名のことさく覚へかの川原
谷川に生てことごくの聲を聞得て鳴く處もなれるしりれなて
是ぞかしらなりとおもひ定めしより流ある一字のもと汎ちらちらさと
こそ失なわれぬるやらん

再考

加茂真淵云今井聴云かはづハ萬葉にも祝詞にも一

谷潜とて山河に住みて音のいとをかしき物なり今も
夏より秋かけて鳴故に萬葉には秋の題に出せりいにしへの
田野陂澤にもなきてうたてかしましき物なれバ後世ハ
もてはやさるゝものをのみよむはいにしへの心ならざるなり
萬葉に「おもほえずきませし君を佐保川の蛙きかさ
せてかへしぬるかも　とよめるをみても音のをかしきことを
しらる今の俗にかしがましき物をいふにも乃かはづなど
さてそれを春にはいまだなきを出さずして夏のなるやうより
秋をかねてなく鳴なり　とぞ
○愚案に谷ぐゝのさわたりして蛙なりといへる引證を得ざれバ
姑く一説とすべし山河に住みて音をかしきことと見えて
いつれいゝなる萬葉にもことさらに見えざれども一編中
必秋なりともさだめがたしこれ古質の常なりして種
類の物をいへるがちりにまろかしとなく混じて同名に詠る
其例すくなからずされども第六「おもほえずきませる
君を佐保川乃かはづきかせてかへしつるかも　又蛙に
よせたる戀歌に「朝霞鹿火屋が下になく蛙こゑだにきかば
我恋めやも　とあるなどもみな秋なくものをよみて雑題も
秋なり　又後撰集雑四かはづをきゝての端書して　我
宿にあひやどりしてなくかはづは夜になればや物は悲し
き　是も秋の物とこそ聞ゆれ　又萬葉「佐保川の清き
川原になく千鳥かはづとふたつわすれかねつも　なくとよめる
こゑとめでしと聞えたる　かはづなく吉野の川
く六田の淀　かはづなく神奈備川　かはづなく清川原
などすべて山河の清流にのみ詠合せて田野の物など
よみたることなし萬葉一編にいへることなしえより井堤を詠へ

古今集に見へし六帖にも載し歌なりかくしかじかは
混じて名は俳言なることを知るべし

○形美しく声の面白き詩歌によころあるに出ずし
カジカといふ名ある俗言にして京の旅にはし
をしよう海おくカハヅとよむべし萬葉集を見よ

萬葉
内匠寮大属按作村主益人聊設飲饌以饗長官佐為王未及日斜王既還帰於時益人怜惜不厭之帰仍作此歌
不所念来座君乎佐保川乃河蝦不令聞還都流香聞

諸國の河鹿といふ魚

○伊豫大洲のかじか鰡に似て小くして声ある茶碗の底をこすりたるやうなる鳴声にて秋鳴なり鳴時は鰓を動かすなり大和本草に杜父魚をかじかとす本草杜父魚の
鰍の字不載

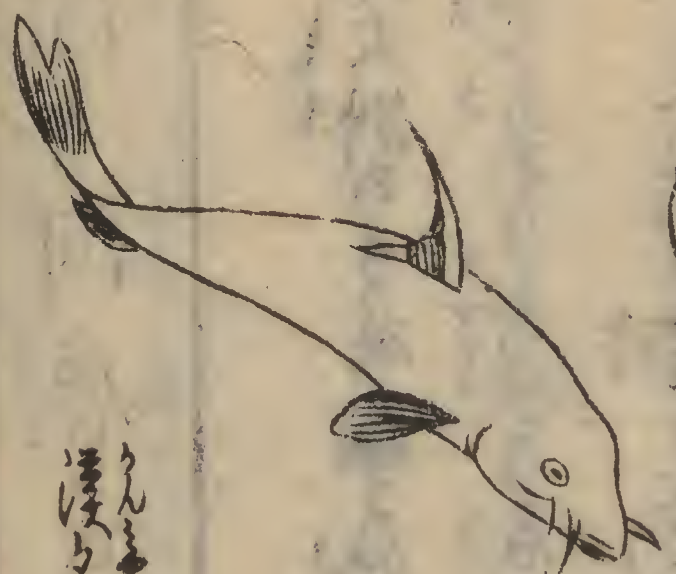
○加賀国のかじかは頭大きく尾は細く脊黒く腹白し其首鼠に似て小なるは一寸許大なるは二尺許但し小は声あるはし

○越後国のかじかは鯊に大く黒斑ありて鯊のしかは二三寸大は五六寸あり蝦蟇に似て有り夜鳴く但し秋国山川にも多し四季ともに山とんこと云大路てどんぐ係らせといへ

〇石伏(いしぶし) 一名ごり

此魚は海河ともに
あり 鼻のあたまに髭の
下にひも有て石に
つく杜父魚の類なれど
小なる者なり 口大きく
ひれに刺ありて
海八やうなるものにけり

そ添 とし



〇䲅々(ぎぎ)

漢名黄顙魚

〇澁縁ある魚とらひ 播州にては女郎
とらへ魚ともに色青く 咽の下に針有
おくれて人の手をさす
此魚は鱨絲魚海河ともに有

小三寸より大四五寸
腮の下に
黒斑あり

〇越前霰魚(えちぜんあられうを)

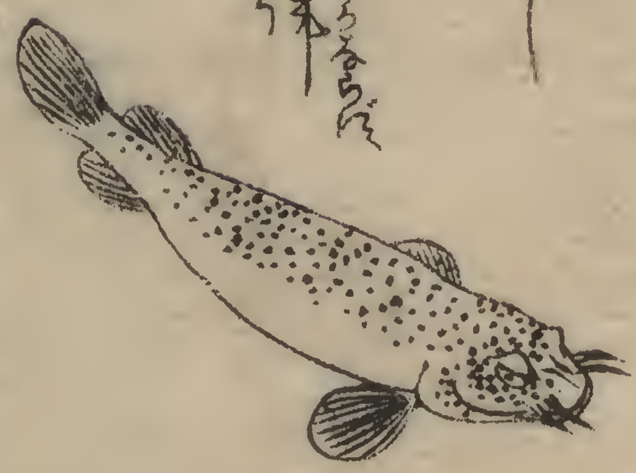
〇此国の名物なり 杜父魚に似たるも
とくに霰のふる時腹をうへにして流るといへ
一名カクブツ 越前にて杜父の種類
杜父ともひていやうるものなるべし

〇石くらひ

〇ドングロひもん

刺なし

漢名



〇杜父魚(とふぎよ)

〇イシモチ 川ヲコゼ 伏見 〇クチナハトンコ 伊勢

〇カル 差義 〇ムコ 近江

水底に居て石に
附て石伏に似たりコチに似たり
黒斑ありて川にあり 鰭ともひれに刺